



超短編集

ハアモニイベル

目次

III. 創作 1	
微笑む肖像	3
ロマンティックな挽き肉	7
イシュタルの影	11
冬の炎	13
IV. 創作 2	
宿命の CANDIDE	23
Killing me softly with aEpic	26
ある『幻想小説』	29
触覚	38
夜のリリース	40
I. 訳詩してみた (時々跳訳)	
The Shadow Of Your Smile	45
鳴かぬからすの声を聴いてみた	46
It was in the old days	48
As Time Goes By	50
Killing Me Softly	53
Gold Finger	56
野口雨情の「ぬばたま」を訳してみた	60
大勢の人たち	62
Travelogue For Exiles	64
SELF-PITY	68
莊子を訳してみる	70
II. かなり跳訳／もしくはパスティーシュ	
白い月の落葉	79

III. 創 作 1

微笑む肖像

*

**** 『微笑む肖像』 ** ** 荒涼とした
砂漠をゆく 幻の駱駝が、
ふいに
輪廻するように、

ときに肖像画は、
物語を話すことがある。 ** **

** ** ルーヴルから その日、
一人の怪盗の手によって ** **

** ** 《彼女》は その微笑みと共に消えた

よく似た六枚の微笑みが そのあと、
六人の金持ちに売れたそうさ。

或る日、《彼女》が何食わぬ顔で戻ってくると
人々は、あらかじめ準備しておいた詳細な ** **

** ** 彼女の細部の原型を取り出してきた
そして入念に、彼女の全身を調べたという。

また、ある人々は、彼女がそもそも誰なのか
以前からそれを知りたがっていた。
高脂血症を病んだ人物のセルフイー（自画像）であるとか** **

** ないとか・・・はたまた、**

** **画家の母であるとか ないとか・・・
美女の行方はずかめていない。
勿論、あなたにはお解りだろう
《彼女》の名前は、ダヴィンチ作『Mona Lisa』だ。

戻って来た時、** **

** **オークションハウスで8億の値がついたと言うのは
攫われた姫君、クラナッハ作『ジビュレ・フォン・クレーフェの肖像』だが、
この《彼女》には有名な妹がいる。

ホルバイン作『アン・オブ・クレーヴズの肖像』のことである。1539年、イングランド
国王ヘンリー8世は、妃を探していた。そこでお抱えの宮廷画家ホルバインを外国へ派
遣する。

姫たちの肖像画を描かせる為だった。

そして、選ばれたのが** **

** **四番目の妃となった アン だった。

ただ、その美貌の肖像画は、じつは
クロムウェルとホルバインの合作だったらしい。

王室史上最高のインテリと言われ、スポーツも万能であったヘンリー8世は、気性も荒
く、離婚に反対したトマス・モアを処刑して六回も結婚をくり返した人である。

それが実際に、やってきた実物のアンを眼にしたとき。

そのささやかな瞬間が、歴史に彩りを添え

半年後、** **

** **まったく肌に触れられぬまま アンが「王の妹」となり、
クロムウェルの首がやがて、ロンドン橋の上で** **

** トマス・モアと同じ景色を見ることを意味した、のも、**

** **全く、オカシな事ではなかった。

それにひきかえ、自分を奪わせ
その後も尚、奪った男の心を奪い続けて** **

** **けして離さなかった《美女》もいる。

金の為でなく、ただ その絵のために
その男は 奪い
二十五年間、
どんなに貧困なときも 肖像を手放さず、抱き続けた
(モナリザが盗まれた頃と同じ、
1900 年ごろの話である)
その名画泥棒が手に入れたのは、
当時、世界最高額の絵画だった
ゲーンズボロ 作
『デヴォンシャー公爵夫人ジョージアナ』である。

実物は、英国一の美貌といわれ、
セクシーでもあり、スキャンダラスでもあった。
「待ってちょうだい、・・・十七のころは、誰もが振り返るほど
美しい公爵夫人だったのよ。それを覚えておいて」
そんな魅力的な彼女の死後、
一世紀を経て、オークションにかけられた時も、なお
その魅惑によって、誰もが振り返るほどの飛びぬけた落札額を叩き出した。
そして購入には短期間の一般公開が義務付けられた。 ** **

** **男が、彼女を奪ったのはそのときだ。
1876年5月の夜であった。

それから、二十五年間、片時も離れずに
彼は、彼女と過ごしたという。 ** **

** **旅行の時は二重底の鞆の下に入れ、
寝るときも、マットレスの間に挟んで伴に眠った。
警察に追われ、窮地に陥ったときもあった
カネに困ってどうしようもないときもあった
そんなとき、同業者は誘いの水に向けてくる
だが、その肖像画だけは、
どんな時でも、頑として、男は守り続けた。
やがて年老いて、
ピンカートンの探偵たちに追いつめられるまで。

どんな時も、彼と共にいた美貌の公爵夫人は、後世
1997年パリで謎の死をとげる元英国皇太子妃を子孫にもつことになった。
そして、
その美貌の肖像画を愛し続けた男は、
シャーロックホームズの宿敵、モリアーティ教授のモデルになった。 ** ** *

ロマンティックな挽き肉

ロマンティックな挽き肉

——あの左手の残酷は、その右手の歓びである。

きみは、いま静かに床について居て
もうすぐ死んでしまうのだ、としてみよう。

それを見た一人の友人が、「やはり最後は漱石か」

と、一言つぶやく。

そこから、この詩は始まるが悪く思わないでくれ。

するとね、きみは、死にきれずにその友人に聞くだらう。
「それはどういうことか？」とね。

すると友人は、こんな風に

語りつづけるんだ……

漱石が胃弱だったのは御存知の通りさ。なのに食への意欲は旺盛だったらしい。
一説では、末期の言葉は、「何か喰いたい」だったなんていう話もある。
最期は、上等なワインを一口飲んで、永眠（ねむ）りについたとかね。

そこで、きみも、最期に何か食べたくはないか、と思ってね。
とはいっても、もうすぐ、お迎えがきてしまうわけだが・・・。

さあ、何が食べたい？

云ってくれよ。最期なんだから、

遠慮しないで。さあ、

たとえば、子どもの頃に大好物だったものなんかどうだい？
俺はサラミが好きだったなあ、きみはどうか。
好みが同じなら、「食べられる国宝」なんて云われてる“マンガリツァ”のハムなんか
どうだい。
ハンガリーは街並みも美しく、愛する女性を伴っていれば、尚理想的さ。
伝統のある有名なカフェ巡りだって出来るしグルメにはうってつけだ。
世界一のカフェと評判の“ニューヨークカフェ”なんか、カフェの概念を変えてしまう造
りだよ。
それにあの、ドナウ川のナイトクルージングで観るブダペストの夜景が幻想的でね。
そんな風にすごした翌朝、
パンとスープに添えられて出てくる、たっぷりのマンガリツァ・ハム。
毎朝食べても飽きないという絶妙な味を、最期に頬張ってみたくないかい？

もしも、きみがマンガリツァでなく、イベリコ豚でもいいなら、スペインにしよう。ハ
ムも果物も魚介類も、格安なのに、何を食べたって旨いときてる。天国に行く前にぜひ
一度は立寄りたい処だよ。

フレンチの高級な料理を堅苦しく食べるのは来世にまわして、むしろ穴場のベルギーに

行ってみるのだって悪くない。

死ぬ前に、ベルギーのムール貝を食べていけよ。凝った料理がいろいろあるんだ。
ウサギや鹿だってある。ジビエだな。煮込んだ料理がまた、何ともたまらないぜ。

何？ そうか、それ以上に刺激のある美味しいものが食べたいっていうんだな。

じゃあ、マレーシアできまりだよ。イスラム風、インド風、トルコ風、三通りの辛い料理が堪能できる。

多国籍風のオリジナル料理が十分に味わいたいなら、シンガポールにもついでに寄ればいいさ。

さあ、どうだい、段々と死ねなくなって来たろう。

そうさ、なんたって、きみは、古代ギリシア最古の文明があった地に行っていないからな。
2500 年前からあるグルメスポットだっていうのに。

クレタ島は、
エーゲ海の最南端、
東地中海の真ん中辺りにあるのさ。
ギリシャの島の中では最大（沖縄本島の七倍くらい）で、
その広大な土地に
オリーブやトマトやアーティチョーク、……
豊富な柑橘類に、葡萄にバナナ、……
それこそありとあらゆる果物と野菜がつくられてる。

なかでも、
オリーブ油とハーブに特に恵まれている。
最高級の ExtraVirginOil そして 野山であまた取れる天然ハーブたち

オレガノ、マジョラム、ローズマリー、タイム、……

蜂たちは、

それらのハーブや柑橘類から独特の上質なハチミツを収集してくれる。

そして、

それらのハーブを食べて育った羊や山羊からは、クレタ特産のチーズが得られる。

ギリシアでは、塩とオリーブオイルだけで、サラダもパンも、十分に御馳走となる。

なのに、新鮮な魚介類に

チーズやトマトを加え、

ニンニクやハーブで炒めたり和えたりした

バリエーション豊富な逸品が種々供されるんだ。

どうだい。もう既に天国だと思わないかい？

クレタの通りを歩いていると、程好く灼けたスブラキ（串刺し肉）の何とも言えない好い匂いがしてくる。そこに歴史のうねりを漂わせながら、それでも

その香ばしい煙りが

この世界の素晴らしい一端と

瞬間を、

これ以上ないほど伝えてくる。

どうだい？ まだまだ先は続くんだぜ

もうこうなったら、まずは絶品の焼き鳥をば存分に喰いに行こうじゃないか。

とりあえず、駅前まで。

イシュタルの影

ツイッターノベル

『イシュタルの影』By ハァモニィベル @

古代の女神イシュタルは死んだ恋人の為に冥府を下った。地獄の門は七つあり、それをくぐる度に、彼女は身につけているものを脱がねばならない。最期、冥府の女王の前に立った時、イシュタルは一糸まとわぬ裸だった。

その美しさに撃たれ嫉妬した冥府の女王はイシュタルを・・・

だが、愛と美の女神は闘いの女神でもあった。

チョコを一つ取り上げて口に入れると彼は、レディー・ゴディバの裸の伝説と一緒に、そんなイシュタルの神話を思い浮かべた。紅茶は濃いアッサムだ。物語を聞かせると彼は瞳を上げ、彼女に「君はイシュタルよりも美しいよ」そう言って、また熱いティーカップに口吻をした。

部屋に帰ると彼女は《鏡》の前に立って自分の姿を映してみた。彼の言葉を確認するように...その時だった。「美しいのは貴方じゃない」突然、鏡の向こうの自分の姿がしゃべった。その表情も動作も自分のものではなかった。その鏡の自分が「美しいのはわたし」とまた言った。「貴方は、美しいわたしを見てるだけ」。と・・・

翌朝お気に入りの服と靴が失くなると、不穏な噂が耳に入った。自分があちこちに出没し考えられないことをしているというのだ。それにつれて身の回りの品が消えていく.....、影は少しずつ少しずつ本物の私と入れ替わろうとしているのだ。そして.....、ついに、影は.....、彼の元に現れた

鏡の影が投げた言葉「貴方は私を見て、自分を美しいと思ってるだけ」というセリフが彼女の脳裏にこだましていた。以来、鏡に自分の姿が映らなくなるという恐ろしい時があった（何処へ？）映っているメイクの時にも誰も気づかない一瞬、自分にむかって不敵に唇を歪めて嗤う影をそこに見た。

彼女の姿が鏡から消える時、必ず、影は鏡を抜け出していたのだ。影は、彼女自身に成り代わろうと密かに陰謀をくりひろげながら迫っていた。そして、とうとう影は彼の元へ…。予感がして、駆けつけた時、いつもならきちんと閉めておく筈の部屋の扉が、微かに開いていた。既に！影は彼と共に居た……

まるで、口吻を終えたばかりのようなふたり。見つめ合ったまま何かを話している。（何を話しているの？それは、わたしじゃない…）ふたりは互いに瞳を見つ合っていた。彼は、美しい影に見惚れるような表情で影の（わたしの影の）肩に触れた……

「君は利き腕が彼女と違う」。途端に、影は顔を覆って泣いた。と同時に、ピシッ。と、おでこが罅割れた。影は彼の胸に顔を埋め、激しく嫌々をする。「それに、」彼は言った。「君を見ても、僕の中にいつも映る彼女がいない」ピシッ！ピシッ！「あゝあゝア~~~~嫌、嫌やああああ…」

おでこから顎にかけて顔に大きな亀裂が走り、影は抱きしめられた彼の腕の中で激しい叫び声をあげて、ついに粉々になって散った。「あっ」思わず私は部屋に飛び込む。「どうしたの？ いっ一体。・・・なに？ 何だったの？」「鏡さ。鏡が君に嫉妬したんだ。君の美しさに。でも、僕は鏡に映らない君までを、深くまで、すべてをちゃんと愛してるから騙されなかったんだ」

（『イシュタルの影』ハァモニィベル）

冬の炎

【冬の炎】

友人のハァモニィベルのもとを、私はクリスマスの前日に突然訪れた。孤独な彼を慰めるというのは口実で、彼からまた役に立つアドバイスをもらおうと思ったのだ。ハァモニィベルはくつろいだガウン姿で、ソファにもたれて紅茶を飲みながら、さっきまで読んでいたらしい皺苦茶の手紙と、数冊の本を目の前のテーブルに広げたままだった。手紙は随分くたびれていて、何ヶ所か破れてしまっている。その脇には小型の外国語の辞書が一冊置かれていた。彼は大きなティーコジーを外すとポットがまだ十分温かいのを確認してから、私の分も紅茶を洒落たカップに注いで出してくれた。

「お邪魔しちゃったかしら」と私が言うと、

「とんでもない。大歓迎さ。ちょうど話し相手が欲しかったところだよ」と彼。

「手紙みたいね。それ」

「ああ。ユウコフという少年が書いたロシア語の手紙さ。マカリッチという男に宛てて書かれている」

どんな手紙なのか私は好奇心で尋ねてみた。すると、ベルは中身をかいつまんで説明してくれた。それは次のようなものであった。

*

クリスマスの晩にね、まだ幼いユウコフは親方や兄弟子たちが着飾って出かけたあと、一人留守番をしてるんだ。そして帰ってくるまでは、どんなに夜が更けても、眠らずに待っていなければならない。ユウコフは一人きりでたまらなくなってね、戸棚から、こっそりインク壺を出してきてボロボロのペンで、ほらこの皺苦茶の紙へ手紙を書いたのさ。

誰よりも大好きな、あのマカリッチの旦那様へね。

ユウコフは以前、田舎に住んでいたんだ。マカリッチという旦那のお屋敷にね。そこの
使用人だった母親と一緒にとても楽しく暮らしていたんだ。だが母親が死んでしまった。
すると、まだすごく幼いのに、早々と都会に奉公に出されてしまったんだ。この手紙に
は、そこでの生活が報告されている。ちょっと読んでみよう。

『きのうわたしはおやかたにかみのけをつかまれ、うらへひきずっていかれてぶたれまし
た。あかんぼうのかごをゆらしながらいねむりをしたからです。このまえもおかみさん
がサカナをあらえといったから、しっぽからあらったらおかみさんがいきなりサカナで
わたしのかおをつきました。どうしてサカナをしっぽからあらってはいけないのか、わ
たしにはわかりません。しょくにんたちは、わたしにたべものをぬすんでこいっていい
つけます。こないだもそれを、おやかたにみっかってうんとぶたれました。ぶたれるの
はいいんです、けれどぶたれたあときまってバツとしてなんにもたべさしてくれません。
たべるものは、まいにち朝はパンだけで、お昼はゴツタ煮で、夜はパンだけ、です。お茶
やスープはみんな、おやかたとおかみさんがのんでしまって、わたしには、くれません。
夜は、お店でねます。でもあかんぼうといっしょです。あかんぼうとねかされると、あ
かんぼうがなくのでねむれません。あかんぼうがなきやむまでかごをゆらしてないとぶ
たれます

マカリッチのだんなさま。おねがいです。

わたしをまた村へつれかえってください。どうかおねがいです』

ここでね、ユウコフが泣いていたのが手紙の染みで判るんだ。旦那様のもとで、どんな
仕事でもしますから傍においてくださいって、このあと書いていてね、そして……、

『村へにげていこうかと、いくども思いました。でもわたしには

靴がありません、雪でこおった道は、はだしではどうしてもだめです』

こんなひとりの少年の願いが綴られた内容さ。

「それで、マカリッチの旦那様は迎えに来たの？」

「さあ、どうなったんだろうね。ユウコフがこの手紙をちゃんと出せたのかさえ疑問な
んだ」

「靴を贈ってあげたいな。私の靴を贈るわ。私は裸足で帰ってもいいから」

「ふふ。君らしいな。でも安心していいよ。これはね。じつは、チャーホフの『てがみ』という短編のなかの話なんだ。

この手紙を読むと、逢いたい人と逢えるだけでクリスマスの奇跡なんだと、僕には思えるよ」

＊

普段は表情のないハァモニィベルが笑った時は何ともいえない人を惹きつける魅力があった。彼は、「きみのブーツをユウコフに贈ってやれなくて残念だよ」と笑いながら、丁度遅い食事をしようと思ってたところだし、食事は一人より二人の方がいいからと言って、夜の軽い食事を御馳走してくれた。

「銀の食器もないし、中世騎士の食卓とはいかないけどね」

「このお肉やけに美味しいわ。牛とも羊とも違う...何というか」

「鹿肉の香草焼きさ。こっちのお粥みたいなのはフルーメンティといって、大昔クリスマス・イブの定番料理だったんだ」

私は食べながら、ふと気がついて訊いた。

「ところで、その小さな赤い本は何なの？」

「これかい。こっちは、ある少女の話さ。あの手紙のような少年もいれば、

こんな少女もいる.....

『プレゼントのないクリスマスなんか、クリスマスじゃない』

そうジョーが言うと、おかあさんは言いました。

『クリスマスの朝、枕の下をご覧ください。きっとあるわ』

クリスマスの朝でした。まだ仄暗い明方です。一番に目を覚まし

たジョーは、おかあさんの言葉を思い出して枕の下を探ってみると

小さな赤い本がありました。

この赤い本がその時に出てきた本さ」と、事も無げにベルが言うので、思わず私は、「えっ、どうしてそれが其処にあるの。それにさっきの手紙だって……」と訊いた。

ベルは、意味ありげな笑いを浮かべて私を見ながら、それには答えずに話を続けた。「これらは外国の子供の話だけど、日本だって昔から変わらないさ。実はね、クリスマスには2つあるんだよ」

*

ハァモニィベルは、書棚から本を一冊抜き出して開くと、ある一節を朗読し始めた。高くもなく低くもない、囁くようでありながら包むようなとにかく端正な優しい声だ。ベル自身は自分で「幸福の王子の声」といっている。その声で彼が朗読したのは次の一節だった。

「ところが、みっちゃんの方は、朝、目を醒ましてみるとリボンと鉛筆とナイフとだけしかありませんでした。みっちゃんはストーブの煙突をのぞいて見ましたが、外には何も出てきませんでした。みっちゃんは泣き出しました。いくら沢山贈物があっても、みっちゃんを喜ばせることが出来ないのです。みっちゃんはいくらでも欲しい子でしたから。」

「貴方が言いたいのは、恵まれた子がいる一方でそうでない子がいる、ってことかしら。いえ、待って貴方はそんな平凡な発想はしないから、『貧乏も貪欲もともに飢えているこ

とは変わらない』って、そう言いたいんじゃない？」私がそう言うと、
「違うんだ。僕はね、教訓とかお説教は嫌いだから。それにさ、他人にお説教してるヒマがあったら、自分がね、『いくらでもほしい子』がいたら、いくらでも応えてあげようとするようなお人好しを反省したいよ」

このベルの言葉を聞いて、私は突然、今日訪問したわけを思い出した。で反射的に、
「あっ！反省しないでほしいわ。そこは」と叫んでしまった。「そんなこと言われたら、今日来た理由を言い難くなるもの」

「今日は何で来たんだい？」とベル。

「実は、クリスマスに因んだ詩で何かいいのを、あなたが知らないかと思って。メールや電話より訪ねたほうが色々と蘊蓄も聞けるだろうし、『クリスマスに贈る詩』をなにか書きたいの。あっ...でも、あなたの言うクリスマスの2つめがまだだった。それを聞いてからにする」

「面白いね。そういうことなら、君はまさに、ミス・グッドタイミングだ。いま話そうとしてた2つめの話題がまさに、ご要望の詩なんだよ。朔太郎の詩だよ、」

*

そう言うとベルは、また別の本を開いて、聞き手に解りやすいよう巧みに間をおいて、その詩を朗読しはじめた。「

クリスマス 萩原朔太郎

我が隣の子の羨ましきに
そが高き窓を覗きたり。
飾れる部屋部屋
我が知らぬ西洋の怪しき玩具と
銀紙のかがやく星星。
我れにも欲しく・・・
我が家にもクリスマスのあればよからん。
耶蘇教の家の羨ましく
オルガンの唱歌する声を聴きつつ
冬の夜 幼なき眼に 涙ながしぬ。

」
＊

「ベル。あなたは、私に私のクリスマスを見つめさせようというのね」
「そうかも知れないね。文化伝統のなかの Xmas や 風俗流行・世間一般の Xmas と、そして、人それぞれの、その人の Xmas がある」

「ねえ、ところで、ベル。あなたは、Xmas に何か贈るの？」
「僕かい？ 僕は…… これさ、【冬の炎】とでも題する詩物語を……」

＊

【冬の炎】

冬—それは—僕には果てしない孤独。
原始の冬 いにしえの人々はそこで火を愛した。
赤々と燃える火に、人々の身体は火照って暖まり
その温もりのなかにやがて微睡眠
ウトウトと優しい気持ちで一年の過ぎた日々を
思い出し包まれる

火よ、君は
冬を暖かくするまばゆい紅い宝石

」
ベルはそこまで即興で詩を創ると、いきなり私に訊いた。
「きみは、カーバンクルを知ってるかい？」
「ええ Carbuncle なら、以前調べたことがあるわ。『青い紅玉』ってシャーロックホームズものを読んだ時にね。確か、『赤い宝石』と『伝説上の怪物』と両方の意味があるって」
「うん。伝承では怪物がどんな姿をしているのか、説が一定せず不明だけどね、ただ、額に真紅の宝石を持っていることと、その宝石を手に入れた者は富と名声を得られるという

点は、どの説も共通しているんだ。通常、カーバンクルと言えはルビーやガーネットなどの赤い宝石のことだけど、面白いことにそれらの宝石もまた、持つと富と名声が得られると言われていたんだよ」

すると、ベルは小さな碧い箱を取り出してわたしに手渡した。蓋を開けてごらん、と目で合図するので、わたしは受け取った碧い小さな箱の蓋を開けた。

彼は詩の続きを詠みはじめる……

僕はきみに
紅い宝石を贈りたい
きみの冬を暖かくするために
そして、
それはきみが
僕の冬を灯す暖かな火である証

IV. 創 作 2

宿命の CANDIDE

「宿命の CANDIDE」

どうしようもなく雨が訪れる日々がある。
だけど長くは続かない。
けれど、あのときは...
雨は、いつまでもやまなかった...

それを予感というのなら、たしかに（言えなくもない）
けど、それは、あまりにも哀しすぎることだった。だから...、
だから、あの日...、
すべては、凍りついたんだ。あの瞬間に。

*

まだ少年の頃、一度だけ人が殺されるのを見たことがある・・・。
それは、ある風変わりな少女との出会いからはじまった。
恋人に殺されたい。

それが少女の唯一の願いであり夢だった。
「ねえ、あなたは、わたしをどんな風に殺してくれる？」
それが、遭うたびに必ず訊く彼女の言葉だった。

*

それを周囲に話しても誰も真に受けはしなかった。ただ、唯一親友と呼べる朝雄だけはぼくの話の聴いてくれた。だが、かれは彼女の奇行をごくあたり前のように聞くだけだった。

それはきっと、朝雄自身が変わっているせいだ。朝雄はいつも、自分が自然の一部でないことを悔やんでいる人間なのだ。彼は、自分が山の木や、岩であればよかった、と常々ぼくに話していた。自分が、雑草や川でないことが、彼には辛かったのだ。ある意味、彼もまた奇人なのだった。だから、ぼくは、彼女の奇人ぶりを、もうひとりの奇人に相談していたことになるだろう。

*

ぼく自身については、とくに変わった性質はないと思う。強いて言うなら、真夜中が好きということだろうか。ぼくは子供の頃からずっと真夜中を愛していた。それは、きっとぼくの名前と関係している。僕の名は深夜（しんや）。生まれたのが真夜中だったからそう名付けられたらしい。それは、彼女の名前の由来と同じだった。真夜（まや）というのが彼女の名だ。ぼくたちは、互いの名前を知った時から、すでに運命を感じていた。

*

2

Killing me softly with aEpic

Killing me softly with a Epic

オートマチック？ それとも……。 「リボルバーだ。そこのS&Wをみせてくれ」。なるほどアンタ、プロだな、眼を見れば解る、闘う男の眼をしているよ、アンタになら頼みたい仕事がある、どうだい引き受けちゃ貰えないかな。

*

猫探しはしない主義だ、なのに我ながらどうかしてる、こんな羽目になるとは……。家出した女子高生を探す方程式なんて洒落たものがあればいいんだが生憎そうはいかない。もっとも、方程式を当てはめて解けるような仕事なら引受はしないが。それに生憎だが、俺は隅で燻ってるアマチュアにすぎない。

*

手掛かりは写真一枚だった……。この写真を誰かが見たとき、そいつが綺麗なモノを初めて見たような顔で、頓狂な声を上げたとしても全く不思議じゃないのを俺も認める。事実、写真を見せるたびに、その飛び上がる反応を見せられることになった。それでもターゲットは美しいばかりじゃないようだ。失踪する直前、彼女は図書館でデカルトの本をビリビリに引き裂くという事件を起こした。それから姿が見えなくなったらしい。

*

着飾った街のなかを、俺は消失した「主体」を探して歩きまわるハメになった……。目の前にあって疑いすら抱かない明瞭なものが今やどこにも居なかった。どんなに現象が

揺らいでも、頑として不変なものの方。疲れきった俺は、とうとう求めるものが目の前に無いということこそ、不変の真理に思えてきた。擦り切れそうだった。

*

俺が目を醒ましたとき、女が横でリンゴを囓っていた……。そして、何が嬉しいのか妙に高く明るく笑った。天使の羽根は羽撃くとこんな音がするのかもしれない。ただし、天使は、リボルバーの銃口をこんな風に俺の胸にあてながらリンゴを美味そうに食べたらしなう。

*

ベッドサイドの卓に携帯電話が見えた……。それが鳴ってくれないか、と密かに祈る。鳴った瞬間、リボルバーの輪胴部を握ってしまえば、相手が筋肉のお化けだとしても銃爪を引くことは出来なくなる。機会（チャンス）を待っていた。

*

しかし、携帯はいっこうに鳴らなかった……。その前に一発の銃声が響いた。

*

女は、そのとき……。写真を見ていた。飛び切りイイ女が写っているが、見ているのはそれより少し大人になったイイ女だった。もうリンゴは食べていない。女は俺の胸の上にその写真を置いて言った、「あれから10年も経ってる。なのに」、女は俺を見ていた。

*

ああ、何でもやり抜く主義なんだ……。それに君には絶対に逢って見たかった。俺がそう笑った時、女は、悲しそうに、「私が見えるのは、もう、貴方だけだよ。」そういうと、

いきなり、女は銃口を自分のこめかみに当て、俺が驚くより早く引き金を引いた。

*

血まみれの死体……が、俺の上に覆いかぶさる、そう思った。ところが、ベッドにも、部屋にも彼女の痕跡はなかった。何も——。手掛かりは、ただ俺の胸の上に置かれている一枚のこの写真だけだ。

※

ある『幻想小説』

ある『幻想小説』

放課後の教室の隅にある誰かの机の上に一冊、文庫サイズの小さな『幻想小説』が在るのを見つけた時。その時ほど『それ』が確かな《幻想・・・》と化すことはないだろう。

有り得ることばかりの空間と時間の中にフツーに置かれてしまった《幻想・・・》。——という

小さく開いた穴

《それ》を塞いでいる、ありふれた型をした蓋のように、『それ』自身もやはりまた、普段通り偶然そこに横たわっているというだけだ。

どの教室にも居るように、その教室にも担任が居た。

それは偶々、若い女教師だったのだが、美しいとも利発とも言える彼女の特徴は、＝それ＝を信じてもないクセに、＝それ＝がリアルに怖いことである。王子様に会わない限り絶対に眼を開けないような一途な可愛い頑固さを抱えたまま、それなのに、だからこそ、いつも揺れているのだ。

その彼女がその日偶然、教室に入ってきて、その『幻想小説』をみつけたみたいだ。その仕草から、とりあえず手に取ってみた、という方が正確であったけれど、してみると、それは、彼女の少々浅めだが歳のわりにはけっこう広い知識の中にも心当たりの無い変な題名だったし、特徴がある著者の名前も、その時初めて見るものだった。

（ 出たばかりの本なのかな.....! ? ）

裏をめくると新刊ではないと判ったが発行年月日が、なんと彼女の誕生日とピッタリ一致していた!?

そして、更に奇妙なのが、その下に記載された改訂の日付で、何とそれが明日なのだ!?

瞬間的に誤植を疑ったが、日付のすぐその下に小さく [★誤植に非ず] と注記がある!!

(えっ、どういう事? ……)

幻想の扉を開いたら、まずは、戦慄するのが礼儀である。彼女もそこで遠慮なく戦慄した。そうなってしまったら、勇気を奮って、「その場所」で夜を過ごしてみなくては吸血鬼には出会えない、というのがやはり伝統的な作法であろう。礼儀正しい彼女は、やはり、と言うか、とうとう、本を持ち帰りその夜、ベッドでそれを読み始めてしまった。

幻想小説と思われた『それ』は、読んでみると全篇流れるような叙事詩であり、韻文ではないけれど流れるような散文で、歩行するというよりダンスする様に、そして、まるで遠くまで背中に乗せて泳ぎつづけていく様に、彼女を連れて中へ中へと、物語と一緒にどこまでも流れていった

~~~~ 摩天楼鉄道に乗り、やがて、エデンという駅で降ろされた主人公が、そこに巨大な商業都市の栄えを見るまでの（「第一章」）。さっき乗ってきた列車が今世紀最後の列車だと聞かされ、仕方なく彼女が其処で暮らし始める（「第二章」）。すぐに其処に住む人間達が皆ドラキュラである事に気づき始める（「第三章」）。彼女を狙って毎日襲ってくる吸血鬼の群れ。特に執拗に追われた或日、窮地を救ってくれた善良な青年と出逢う（「第四章」）。青年の善き家族とも知り合い仲間も増え、徐々に彼女が彼に惹かれてゆく（「第五章」）。だが彼ら善良な人々、人間だとばかり思った人達は、全員ロボットだった（「第六章」）。……

深夜をまわり、彼女は朦朧とし始めていた…。カクッと急に意識が墮ちそうになる。

強烈な睡魔に何度も襲われながら、何とか、続きを、その先を、読もうとした。

でも、もう、どう足掻いても起きていられそうもなかった

物語の後半は、そこから、ほとんど夢に溶けていった――

~~~~ 其処での殺伐とした暮らしにようやく馴れた頃、主人公はうっかり罪を犯し、魔女裁判にかけられてしまう。些細な罪なのに重罪なのである。ドラキュラ裁判長と、ロボットの陪審員が出した判決は無情にも、ベルトコンベア労働の無期懲役。主人公（彼女）の犯した罪は、ただ、「假定法ト 未来完了ヲ 使ッテ 話シタ」（と言う）だけ——の些細な重罪なのであった。

その後、——幻想ゆめ——は醒めたのだろうか。

翌朝、伝統と格式ある夢無県立ベルトコンベア高校の、朝礼からも、教室からも、あの女教師の姿は消えてしまった。どこかで、幸せそうな彼女を見た、という者が何人かいたが、その行方は杳として知れなかった。事件か事故に巻き込まれた、というのが大方の視方である。

ただ、《本当に彼女が今まで存在したのかどうか》、じつはそのことの方が定かではない。誰も生まれただけでは自分になれない。彼女は昨夜ドラキュラとロボットの間でその事を味わい、今日、何処かでしっかりと自分を出産したのかも知れない。その姿は透明すぎて、俗世間から見えないだけの事なのではないか、とも思えるが

あの一冊の『幻想小説』が放課後の教室の隅にある誰かの机の上に一冊、なぜかまた同じように置かれていることも、ほとんどの人は気づかないままである。だから、その奥付に記された発行日が、読む人の誕生日と関わりがあるということに至っては、当然、知る由もないだろう。

*

幻想の中でこそ現実うつつの夢から人は醒めることができる。(——著者あとがきより)

触覚

『触覚』

** 夢性の触覚が、渦巻くような慌ただしさのまま動き流れていく。**

** 静粛な昼下がりの晴れた日の空を恥じるほどに。**

** * **

** 感触を、無性に感触を、その日は求めている。**

** 何処かで、鉄を叩く音がする。血が吹き出すまで。**

** * **

** 無数の因子が廿五時であることを告げている。**

** * **

** 彼の堅く尖った瞬間に触れ、おもわず、私は涙を溢ぼした。その時、**

** 彼は、深く澄み切った笑顔で、私を見つめた。**

** * **

** 無数の因子が廿五時であることを何度も何度も告げていた。 **

** * **

** それでも、私の手を掴んだまま、彼はわたしの外皮を **

** 私の外皮という外皮をすべて剥ぎ落としつづけた。 **

** * **

** 剥かれて顕わになった肌— 剥きたての 一つるんとした****わたしの表面を、 ** 今度
は容赦なく、彼は、落書きしはじめた。彼の筆が全身を奔しる。

*

私のからだは、やがて

彼の文字と言葉で、すべて.....埋め尽くされていった。

夜のリラック

「夜のリラック」

深夜という以外は何の記憶もない
街は俺を除くとやけに Lyric だった
足どりだけ、やたらに Epic だったよ
あの日は。

*

鳥籠のなかの話さ
真鍮で出来た
射し込んだ陽がきみの頬に
網模様の影を作る
鳥籠のなかの話さ

*

水の中に潜ったきりじゃないか
続くのかい息？

ほっぺたが膨らんだまま
風の音を聴いているのかい

*

風がなかったよあの日は
確かになかった。
きみを洗い流すような
感情に紫の毒が溶けていく
植物の根の様に。

*

俺以外はリリカルな街を、
エピックに歩きながら
狼に喰われた赤ずきんを助けた、あの日
深夜という以外は何の記憶もない。

I. 訳詩てみた（時々跳訳）

The Shadow Of Your Smile

The Shadow Of Your Smile

あなたが微笑んでいるの
影になって今 もうここにはいないから
あなたの微笑む影が彩るのよ 夢を
夜が眩しく明けるまで
覗いてみてよ瞳の中を わかるから
〈あなたがすべて〉だと。

小さく光る遥かな星に
ふたりの祈りをこめたあの日
涙があなたの口唇に堕ちた
それにわたしは KISS をした
今 胸に溢れだすの あの春が
こころに紡ぎだすの 愛の喜び全て
瞳のなか 途切れない影になってずっと
あなたが微笑んでいるの

鳴かぬからすの声を聴いてみた

そもそも、作者というのが、一休とも、白隠とも、詠み人知らずとも言われる

ハッキリしないつぎの歌。

闇の夜に 鳴かぬからすの声聴けば、
生まれぬ先の 母ぞ恋しき

チラリと調べたら、いろいろ大層な解釈や、解釈不能説が飛び交っているが
わたしが、この詩だけを、素直に読解して、（私流に）訳詩するならば

闇の中で姿の見えぬカラスのように

姿が見えぬ俺の母の
聞いたことのない、あるいは決して言わないであろう、母の声というものを、
俺はふと、幻聴するときがある。

ふと、この心の奥に... 響くときがある。

すると、まだ、互いが離れ離れにならなかった頃の、母胎にいたときの、あの

四六時中も共にいて、内側に俺を抱いていたときの（今は幻の）母というものが、やけに恋しい

だけどそれは決して現存はしない

一休は、6歳で出家し、

母親は、仏門で栄達するような「そんな凡庸な僧にはなるな、どうせなるなら釈迦や達磨のごとき者になれ」と言うような、星一徹以上の女性だったようです。

以上は、一休の歌として訳してみました。白隠の公案だとしても、

あると思えば見えず、無いと思うには胸をつく、空の世界が描かれた作品であることは変わりません。諦観をともなった自律的な悟りのうたとして私は読みました。

It was in the old days

(※ ラップです。歌いましょう)

It was in the old days
～ ゲスな時代に抗して ～

It was in the old days
Not to sit down to DINNER
Not to sit down to DINNER
TILL he had seen some ADVENTURE.
TILL he had seen some ADVENTURE.
Now it was Arthur's custom
Now it was Arthur's custom
It was in the old days
It was in the old days

Not to sit down to DINNER
Not to sit down to DINNER
TILL he had seen some ADVENTURE.
TILL he had seen some ADVENTURE.
It was in the old days
It was in the old days
It was in the old days . . .

／—————

(註)

1. It was in the old days (昔むかし)

2. Now it was Arthur's custom not to sit down to dinner till he had seen some adventure.

(さてアーサー王は、一日を退屈なままで終えてそのまま夕食の席につくのよしとはしない、そんな習わしだった。) ※訳はベル

As Time Goes By

As Time Goes By (1931)

忘れてただろ？
これが接吻（Kiss）だよ
俺にしかできない
君の溜め息と同じさ
今が何時代（いつ）だろうと関係ない

薔薇色に変えたり？
これが世界だと
君にしか出来ない魔法で
愛してる 俺の瞳はいつもそれだけ
今が何時代（いつ）だろうと関係ない

月のひかりは古くなるかい？
愛だって古くならない
溢れてるよ
君が妬いても、憎んでも
結局は 愛してる

決まり文句にしか取れないだろ？
「君が欲しい」なんて。でも、返事次第で
生きるか死ぬかさ

世界にいい女が溢れていたって、そして
今が何時代（いつ）だろうと関係ない

As Time Goes By (1931) Herman Hupfeld

<歌詞>

You must remember

this A kiss is just a kiss,

a sigh is just a sigh.

The fundamental things apply

As time goes by.

And when two lovers woo

They still say, "I love you."

On that you can rely

No matter what the future brings

As time goes by.

Moonlight and love songs

Never out of date.

Hearts full of passion Jealousy and hate.

Woman needs man And man must have his mate

That no one can deny.

It's still the same old story

A fight for love and glory

A case of do or die.

The world will always welcome lovers

As time goes by.

Killing Me Softly

これは、跳訳している部分があります

Killing Me Softly with his song

触れないで...そっと
わたしの悲しみに
奏でるようなその指先で...

唇で、歌うように
やさしく殺して
そして 全てを忘れさせて

「彼は凄って聞いていたの
「独特だって
「彼に会ったのよ
「ほんの少し...だけ、のつもりで
「けっこう若かった。それにね
「わたしが初めて見る感じだったわ」

触れないで...お願い
わたしの涙に
指先でやさしく掬ったりしないで

ただ、唇でそっと
やさしく殺して
そして 全てを忘れさせて

「彼といると頬が染まるの
「大勢の人がいるのよ
「なのに、彼
「わたしを抱きしめてくるから
「恥ずかしいやめてって
「そう思っても、彼は続けるの」

触れないで...激しく
わたしの中には
刺すような指で探ったりしないで

唇でつよく塞いで
やさしく殺して
そして 全てを忘れさせて

「彼、まるでわたしを知ってるみたい
「わたしのことを歌うもの
「透明になっちゃうんだ
「彼の瞳のなかでは
「ただ心だけになって
「抱かれるの」

触れているの...わたしに
どこまでも優しく

苦しみもやさしく愛撫しながら

唇でやさしく

やさしく殺して

そして 全てを忘れさせて

Gold Finger

これは、翻訳です (最終行は付加)

Gold Finger (ゴールドフィンガー)

**あの人は Gold フィンガー
触れるもの全てを黄金に変えるの
ミダスのような手だわね、ふふ、**

**毒蜘蛛の触手よ
そうなの、それほど 彼は、**

**cold フィンガー
貴女を招くわきっと、**

**罪が張りめぐらされた 蜘蛛の巣の中に
でも行ってはいけないのよ。わかるでしょ

黄金に染まったセリフがきっと耳をくすぐる
安心して、彼の嘘は貴女の不安を裏切らない
黄金に染まった貴女が知るのは、**

**キスされた後
それが 死の接吻だった... ** **と、わかるのよ

それがあの人 ** **Gold フィンガー
可愛い人、気づかなきゃダメ**

**彼の金でできた心に
それは 冷んやりとした心

黄金に染まったセリフがきつと耳をくすぐる
** 安心して、彼の嘘は貴女の不安を裏切らない **
黄金に染まった貴女が知るのは、**

**キスされた後
それが 死の接吻だった... ** **と、わかるのよ

それがあの人 Gold フィンガー
可愛い人、気づかなきゃダメ**

**彼の金でできた心に
それは 冷んやりとした心
彼が愛するのは Gold だけ
GOLD オンリー
彼が愛してるのは Gold だけ
彼はいつだって GOLD だけを愛してる
GOLD オンリー
彼が愛してるのはただ純金のお人形なの**

Goldfinger (Anthony Newley, Leslie Bricusse)

He's the man, the man with the Midas touch

A spider's touch

Such a cold finger

Beckons you to enter his web of sin

But don't go in

Golden words he will pour in your ear

But his lies can't disguise what you fear

For a golden girl knows when he's kissed her

It's the kiss of death . . .

From Mister Goldfinger

Pretty girl, beware of his heart of gold

This heart is cold

Golden words he will pour in your ear

But his lies can't disguise what you fear

For a golden girl knows when he's kissed her

It's the kiss of death . . .

From Mister Goldfinger

Pretty girl, beware of his heart of gold

This heart is cold

He loves only gold

Only gold

He loves gold

He loves only gold

Only gold

He loves gold

野口雨情の「ぬばたま」を訳してみた

野口雨情の「ぬばたま」を訳してみた。

ぬばたま 野口雨情

昨日は君を

かへりみで
雲の山路も
こえました
すげなき曲の
たまだれの
雨に泣くかよ
きりぎりす（雨）

それでも君は
久方の
雲井にちかき
花乙女
それでは君は
ぬばたまの
あやもわかぬ
はな乙女（野）

ぬばたま（私訳）

昨日は、君を
無視したけど
苦しかった とても
それが本当の気持ちさ
素っ気ない態度の裏では
土砂降りの雨のなか
濡れたこの頬も 泣き声も
じっと隠してる（名前で署名）

そんなに辛くさせる君なのに僕には
最高に輝いてる 永遠の
それこそ幻のような
理想の女性なんだ
こう聞いた後でも、君に伝わらないとしたら
だったら、君は
綺麗なのは見た目だけの、人の心や誠実さの解せない
黒い妖精ってことになる（苗字で署名）

／本文の語註／

※ 花乙女=褒め言葉

はな乙女=貶し言葉

「はな」を、古典常識として、実とか心（実質を指す語）の対義語で、表面を飾る意味と解せばそうなる。

大勢の人たち

◇現代詩フォーラムの企画スレッド『蝶としゃぼん玉』で、やった「訳」の試み。

通常の「翻訳」にとらわれない、意味を広く裁量した《翻訳》企画だったが、この作品は、わりと素直に訳している。

まず、作品を引用して先に示して、その後にわたしの訳を置く。

※ ※ ※

Many Workmen
by Stephen Crane

Many workmen
Built a huge ball of masonry
Upon a mountain-top.
Then they went to the valley below,
And turned to behold their work.
“It is grand,” they said;
They loved the thing.

Of a sudden, it moved
It came upon them swiftly;
It crushed them all to blood.
But some had opportunity to squeal.

※ ※ ※

働く人たち

スティーヴン・クレイン作／ベル訳

沢山の働く人たちが

どでかい岩球を一個、作り上げたんだ

山の頂上にね

それから、谷に下って行って

出来栄えのほどを振り返り

「じつにみごとだ」

そう言って皆、そいつに惚れ込んだ

すると突然、そいつは動き出し

見るまに彼らをみんな押し潰した

搾りだされる血の海のなか、それでも

何人か悲鳴を上げるチャンスはあったけどね

Travelogue For Exiles

☒ トラベローグ ☒ - 放浪者たちへ -

カール・シャピロ / ベル訳

眼をそらさず覚えておけ

見上げたその空のことを
深く深く吸い込むように焼き付けろ

澄み渡ったその空を
抑えつけるものの無い、あらゆる祈りが、辿り着く先を
さあ、言うがいい、さあ

神聖なる天井に向かって。

何が聞こえる？

空は何て答える？

楽園は奪われた。此処はお前の帰る場所じゃない。

眼をそらさず覚えておけ

見下ろしたその海のことを
伏せた眼で見つけ出せ

その先にある 倦むことを知らぬ 潮の流れを

見届けて教えてくれ

生き物たちの泡沫（うたかた）の日々を
表面にうねる揺りかごや

中に広がる墓の話を

どうしようもなく湧起した波が

おおい被さる

……水と共に、
全ては奪われた。此処はお前の安らぐ場所じゃない。

眼をそらさず覚えておけ

目の前にあるこの大地のことを
其の大量生産工場を越え、牧草地を越えて

遥かに 遠く遠い その場所を。

其処ならきっと、みんながお前を

受け入れてくれる。

話してごらん。頼んでごらんよ

広い森と柔らかな土に。

何が聞こえる？ 大地は掌で何を示した？

地球は奪われた。此処はお前の帰る場所じゃない。

※ ※ ※

Travelogue For Exiles

by Karl Shapiro

Look and remember. Look upon this sky;
Look deep and deep into the sea-clean air,
The unconfined, the terminus of prayer.
Speak now and speak into the hallowed dome.
What do you hear? What does the sky reply?
The heavens are taken: this is not your home.

Look and remember. Look upon this sea;
Look down and down into the tireless tide.
What of a life below, a life inside,
A tomb, a cradle in the curly foam?
The waves arise; sea-wind and sea agree
The waters are taken: this is not your home.

Look and remember. Look upon this land,
Far, far across the factories and the grass.
Surely, there, surely they will let you pass.
Speak then and ask the forest and the loam.
What do you hear? What does the land command?
The earth is taken: this is not your home.

※ ※ ※

SELF-PITY

※ ※ ※

SELF-PITY D. H. Lawrence

I never saw a wild thing
sorry for itself.
A small bird will drop frozen dead from a bough
without ever having felt sorry for itself.

※ ※ ※

己憐（D. H. ロレンス／ベルの訳）

野生の死は
自らを憐れまない

小さな鳥の死でさえも

木の枝を凍え落ちるその時に

感じたことはない筈だ

自分自身への憐れみなど

※ ※ ※

莊子を訳してみる

引き続き、現代詩フォーラムの企画スレッド（『蝶としゃぼん玉』）に書いたものです。

漢籍に挑戦。

先に、（原文）と〔書き下し文〕を示します。

※ ※ ※

知 魚 樂（『莊子』外篇 秋水第十七より）

（原文）

莊子與惠子遊於濠梁之上莊子曰魚出遊從容是魚樂也惠子曰子非魚安知魚之樂莊子曰子非我安知我不知魚之樂惠子曰我非子固不知子矣子固非魚也子之不知魚之樂全矣莊子曰請循其本子曰女安知魚樂云者既已知吾知之而問我我知之濠上也

（この漢字の羅列を

見やすく整理してみると、）

莊子与惠子游於濠梁之上。

莊子曰「魚出遊從容、是魚之樂也。」

惠子曰「子非魚、知魚之樂。」

莊子曰「子非我、安知我不知魚之樂。」

惠子曰「我非子、固不知子矣。子固非魚也。子之不知魚之樂全矣。」

莊子曰「請循其本。子曰女安知魚樂云者、既已知吾知之而問我。我知之濠上也。」

〔書き下し文〕

莊子、惠子と濠梁（ごうりょう）の上（ほとり）に遊ぶ。

莊子曰く、「魚の出でて遊ぶこと従容（しょうよう）たり。

是（こ）れ魚の楽しむなり」と。

惠子曰く、「子は魚に非ず。いづくんぞ魚の楽しむを知らん」と。

莊子曰く、「子は我に非ず。安んぞ我の魚の楽しむを知らざるを知らん」と。

惠子曰く、「我は子に非ず。固（もと）より子を知らず。

子は固より魚に非ざるなり。

子の、魚の楽しむを知らざるは全（まった）し」と。

莊子曰く、「請ふ、其の本（もと）に循（したが）はん。

子曰ふ、『女（なんじ）いづくんぞ魚の楽しむを知らん』と云ふ

は、既已（すで）に吾の之（これ）を知れるを知りて、我に問ひ

しなり。我、之（これ）を濠（ごう）の上に知るなり」と。

／＼

それでは、ベル訳してみます。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

知魚樂（莊子, ベル訳）

莊子と（名家という論理学派の思想家）恵子（けいし）が、ある日、川のほとりをふたり散歩しながら、橋を渡った時のことだ。

莊子が言った。

「ゆうゆうと泳いでいる魚を見たまえ。じつに楽しんでいるじゃないか」

すると恵子が、

「魚ではない君に、魚のことがわかるわけがないじゃないか。何処から

そんなことが言えるんだい」

すると莊子も、

「ならば、私ではない君に、私のことはわかるわけがないじゃないか。

そうだろ」

すると、恵子はさらに、こう言う。

「勿論、私は君ではない。だから、私に君のことはわからない。

君も勿論 魚ではない。だから、君に魚のことは解らない。これは間違いない

ことだよ。そうだろ」

対して、莊子は次のように答えた。・・・（つづく）

＊

さて、ここは、ややこしい所で、様々な（訳と解釈）がある。

たとえば……、

> 根源にたちもどろうではないか。君は「おまえにどうして魚の楽しみがわかるものか」といったが、そのときすでに、僕がわかっていることを、君は十分知っていて僕にたずねたのだ。僕はこの川のほとりで、その道理がわかった。（大濱皓『莊子の哲学』）

>

> ＊

>

> 根本のところに戻ってみよう。君が私に、君はどこから魚が楽しんでいると分かるのかね、と言ったのは、すでに私には魚が楽しんでいることが分かっていることが分かって質問したわけだ。で、いま答えようじゃないか、私はつまり濠川のほとりでわかったわけさ。（蜂谷邦夫『莊子』講談社選書メチエ）

十冊以上の訳を比較してみたけれど、忠実に訳そうとしているせいなのか（？）、魚の心より不可解な訳文がじつに多くて（ごく普通の読者として）正直閉口したのだが、なかで納得できそうなものを次に紹介してみると――

> 「貴様は魚の心はわかるはずがない」といった瞬間に、貴様は私が魚の心を知り得るということのを是認しておる。（そのときの莊子の考えでは、もし恵施が莊子に向かって、「貴様は魚の心を知り得ないぞ」と、こういうならば、その瞬間に恵施みずからは、自分が莊子の心の中を忖度するということのを許しておる。もし甲の者が乙の者の心をつ度するという前提を許すならば、今度莊子が、莊子に非ざる魚の心をつ度するということも、許さなければならぬというのであります。）〔諸橋轍次『莊子物語』〕

>

> ＊

>

> そんな言葉の遊戯は止めにして、根本に立ち返って議論しよう。きみはいま僕に魚でないのに魚の楽しみなどわかりっこないといったが、それはきみが僕に魚の楽しみの方かっていることを知っていて質問したのである。すべて真実なるものは人間の分別知や言論では捉えることはできず、議論を超えた境地で体得されるほかない。きみが議論の上で肯定するにせよ否定するにせよ、きみ自身は議論を超えたところで僕の知っていることをすでに理解しているのであるから、それと同じく、僕はまた魚の楽しみをこの濠水の橋上において議論を超えた境地で理解するだけである。(福永光司『莊子』)

さて、この部分。

私のかってな訳（私的意識）は
こんな感じになった。

(さきほどの莊子のこたえのつづき)

※

「いいかい、よく考えてみようじゃないか。

そもそも、君は、私に『魚のことがわかるわけがない』と言った時、私がかかってないくせに分かったつもりでいるのだと、そう決めつけたんじゃないのかね。それは、わかってないとわかったわけだろう？

少なくとも、私がかかったつもりでいるのだと君はどこかで直観したわけだ。何に立脚してわかったのか知らないがね、私が何に立脚してわかったというのだ、と君はさっき訊いたね、私の場合はね、橋の上に立ちさせずればそこで、魚のゆうゆうとした楽しみが直観するには充分なのだよ。

それに、あのとき、私が魚になったわけではなく、ゆうゆうと泳ぐあの魚が私だったということも、論理ではわからないことだろうが、それがわかる者にとっては言うまでもないことだ、とわかってほしいね」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

莊子の有名な話を（私風に）訳してみました。

II. かなり跳訳／もしくはパスティーシュ

白い月の落葉

白い月の落葉（静夜思）

白い月の落葉が

いく時も

降り散る

夜.

果てしもなく

埋もれてゆく

光の

孤独.

故郷である日 掌に吐きつけた息みたいに

寒く、慄えて

深い底に さだめないまま

沈み埋もれた

哀しみの

凍る裸体.

※

現代詩フォーラムという詩のサイトに、私が建てているスレッド；《蝶とシャボン玉一ブチ企画の館》というのがある（<http://po-m.com/forum/threadshow.php?did=320890>）そこでの企画で書いたのがこの作品。

二葉亭四迷がそのエッセイ『余が翻訳の標準』の中で書いていた

「兎に角原詩よりも訳の方が、趣味も詩想もよく分る、原文では十遍読んでも

分らぬのが、訳の方では一度で種々の美所が分って来る」

というのを一つめざして、書いてみよう、という企画で、忠実な翻訳から、かなり逸脱した創作まで許容して、いろいろ書いてみましょう、というわけで、わたしがまず試みたのがこれ。

『静夜思』は、詩仙といわれた盛唐の詩人 李白（701 - 762）の漢詩で、五言絶句（5文字4行構成の詩）で書かれているのを、わたしはソネット（十四行詩）にしてみた。この作品の場合は、忠実に訳さない方向になんとか誘われてしまい、パスティーシュも超えた、ハァモニィベルと「静夜思」のマリアージュ（超リプロデュース）になってしまった。（翻訳というより、自分の創作になるように心掛けたので今回の元作品はインスパイアされた対象にとどまるという意味）

※

以下、

李白『静夜思』の

原文（白文）と、書き下し文を示し、

忠実な翻訳でも個性差が出る例として、

日夏耿之介と井伏鱒二の訳を付記して参考に供す。

※

■（原典：漢文）

静夜思

李白

——→

牀前看月光

疑是地上霜

拳頭望山月

低頭思故郷

(書き下し文)

牀前、月光を見る。

疑ふらくはこれ地上の霜かと。

頭を挙げて山月を望み。

頭をたれて故郷を思ふ。

[語注]

牀……ベッド(寢床)

○解釈上、月光は室外なのか室内なのか

意見が別れるが、あえて「地上の…かと」と

あるのだから室内に射したものと私は解す。

／—————

静夜思

(日夏耿之介の訳)

牀のへに月かげげざやかだ、

地に霜が降りたかとも感ぜられる、

頭をあげてみ山の月をみる、

頭をたれてふる里をおもふ。

※

(井伏鱒二の訳)

ネマノウチカラ フト気ガツケバ

霜カトオモフ イイ月アカリ

ノキバノ月ヲミルニツケ

ザイショノコトガ気ニカカル

／＼

超短編集

著 ハァモニイベル

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
